

おはようございます。令和5年度の課業は今日をもって修了です。先週は卒業式を行い38期生729名が巣立ちました。今週は入学許可候補者説明会を行い内進生74名、高入生721名が参加、2週間後には入学式です。本校でも新陳代謝が進んでいます。

時の流れは無情です。私たちの思い入れや惜別、気後れなど一切お構いなしに移ろっていきます。ですから私たちは、時の流れに背中を押されたままでいてはいけません。サーフィンやスキーをするように重心を前に移して、行く末をしっかりと見据え、後悔や未練を残さないよう努めたいものです。

諸君が来る令和6年度を前乗りで迎えられることを期待します。引用します。

**【はじめに】** 我が家は、全盲である私、全盲の主人、小学2年生の長男、保育園年中の長女の4人で暮らしています。

私は、平日は点字図書館に勤務し、休日は、家事や、子どもたちの習い事の付添、家族で外出など、慌たしくもとても充実した生活を送っています。

**【母は強い】** 先天性緑内障で生まれてきた私は、不安定な眼圧のため、入退院を繰り返しながらも、わずかな視力を頼りに、生活してきました。

医師からは「将来全盲になる可能性は高い」と告げられていたので、両親は、いつその時が来ても困らないようにと、学習面でも生活面でも、幼い頃から様々な努力をしてくれました。

盲学校の小学部に入り、「まだよく見えているようなので、点字も歩行訓練も、急がなくても大丈夫です」と言う先生方に、母は「いつ全盲になってもその時に点字がすらすら読めたり、杖を使って一人歩きができていたら本人はどんなに心強いでしょう。1年生から指導をお願いします」と言ってくれたそうです。

活字の教科書が読めていた低学年の頃に、漢字も点字も習いました。目の手術をする度に、両目に眼帯をし、何も見えない状態で、母が借りてきてくれた点字図書を読んだ時「点字を習っていて、本当によかった——」と、すごく嬉しかったことを記憶しています。

日常生活の中でも、「人の3倍、5倍の時間はかかるかもしれない、努力も必要だけど、見えなくても何でもできる」と、何でも挑戦させてくれました。

母は、私がどんなに手こずっても、時には泣きながら助けを求めても、最後の最後までやり遂げるのを見守り、待ってくれる辛抱強い人でした。

中学生から親元を離れ、東京での寮生活を送りましたが、何不自由なく身の回りのことができた時、母の優しさや強さに改めて感謝しました。

また、私の眼が見えているうちに、花火大会や蛍、プラネタリウムやハワイの夕焼けなど、綺麗なものをたくさん見せてくれ、そのおかげで、現在子どもたちがそれらを見て、「ママ、すごい綺麗だよ!」と嬉しそうに教えてくれる度、あの時を思い出し、共に感激できるのだと思います。

**【健康ってありがたい】** 私は、20歳の夏に、僅かに残された視力を、自分の意志で失いました。

幼い頃から、眼圧が常に平常値より高く、目薬や飲み薬は手放せない生活でした。また、頭痛・眼痛ともずっと友達でした。中学生・高校生への成長とともに、眼痛の症状は悪化し、学校や行事を休んだり参加できないことが増えました。

それでも、残された貴重な視力を失いたくなく、あらゆる手術をしてきましたが、短大生になり、手術や薬の効果もなくなり、過剰な痛みのため転倒し、何度も病院に搬送され、限界を感じました。

「もうこんな痛みとは付き合っていけない。卒業しても仕事ができない。何より、周囲の人たちにこれ以上心配や迷惑をかけたくない」

生まれた頃から私の眼を診てくれていた主治医の先生は、私の手をぎゅっと握り、涙しながら「今まで本当につらかったね。よく頑張ってきたね。でも、光を失うのは、きっと想像以上に寂しいことだよ。朝も夜もわからなくなっちゃうんだよ」と、眼球摘出手術を願う私を慰留しようとしてくれました。

まだ太陽が見えていた当時の私には、先生の伝えるその意味が理解できず、只々痛みから解放されたくて、泣きながら何度も何度も頭を下げました。

先生は「そっか分かったよ。僕には痛みを理解してあげられないからね」と、とても悲しそうに承諾してくれました。

摘出後しばらく、家事や歩行に不安や不自由さを感じながら、今まで痛みによってできなかった、マラソンや水泳など、動きの激しいスポーツに没頭しました。もしかしたら、そうすることで、視力を失ったショックから逃げることでできていたのかもしれない。

視力を失い、義眼使用の生活になって20年。何もかもが面倒でふさぎ込んでいた時期もありました。「あの時くらいの視力があつたらな・・・」と悲しくなる瞬間もあります。

しかし、痛みから完全に解放され、何の制約もなく自由に、健康に過ごしていることを、本当に幸せと感じ、失ったものは大きいかもしれないけれど、あの時の私の決断に後悔はありません。

【小学校の頃からの私の夢は、「優しい人と結婚し、お母さんになること」】私は、眼が見えなくなっても、しっかり自立させようと、必死に育ててくれた両親を心から尊敬し、感謝しています。

2歳上の兄も、私が見えないことを忘れていたのではないかと思うほど、自転車もスケボーもどんなことでも自分と同じようにできるまで、根気よく教えてくれました。

そんな温かくて、明るく、いつも前向きな家族が大好きで、小学生の頃から、「いつか私も結婚して、お母さんになって、こんな家庭を築きたい」と思い続けてきました。

視覚障害者同士の夫婦が育児をすることに、不安がなかったと言えば嘘になりますが、私は生まれてきてくれた子どもたちが、とにかく愛おしく、たまらなく嬉しくて、どんなことも「私のやり方」を工夫し、母親として自信を持って楽しく育児をしようと、強く心に決めて過ごしてきました。

松本晶子(東京都板橋区在住)「家族に感謝、夢叶ったよ」障害者福祉協会『リハビリテーション2017.11 No.598』

引用はここまでにしますが、このあとラッシュの通勤電車で「私のことを恐らくすいぶん前から見守ってくれていた方が『ここ、手すり持てますよ』とか、『一緒に乗りましょう』などと声をかけてくれた」こと、子供たちに「『もし、今ママの眼が見えるようになったら、一番に何してほしい?』と聞いてみました。長男は『きれいなお花や星と一緒に見たい』と、長女は『ママが運転する自転車の後ろに乗りたい』と答えました。」というエピソードが続きます。人柄が感じられるようなやわらかい文章表現なので、自らの置かれた状況で苦しみつつも、けなげに精一杯人生を謳歌される様がよく伝わってきます。諸君にはどのような気づきがありましたか。諸君も気づいたであろう点を挙げてみましょう。

はじめに、人はそれぞれにドラマがあること。自分のドラマはみな語るけど、誰にもドラマがあることを見落としてはいけません。これを社会学では、エスノメソドロジー、ナラティブと言いますが、ぜひ探究してください。人それぞれにドラマは必ずある、それは自分のドラマと同様に、あるいは自分以上に傾聴すべきである。このことを念頭に人と接すれば良好な関係が築けます。一方、他者を軽視し自分のことばかり偏重してしまう自己憐憫、自己中心、ミーイズムなどという自己愛過剰が、世間に散見されますが、自戒したいものです。

もう一つ、健常である私たちの方が逆に励まされ勇気づけられることにも気づくでしょう。光を失いたくはないが、仮に失っても、それは幸、不幸とは別だ、ということ。そして親の愛情に気づきます。

今一つ芥川龍之介『杜子春』からネタバレの箇所ですが引用します。中学生でも30分で読める短編。読んだことのない人は、鷗外の『高瀬舟』もおすすめですが、多感な10代のうちにぜひ読んでほしいです。

杜子春は必死になつて、鉄冠子の言葉を思ひ出しながら、緊く眼をつぶつておました。するとその時彼の耳には、殆声とはいへない位、かすかな声が伝はつて来ました。

「心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さへ仕合せになれるのなら、それより結構なことはないのだからね。大王が何と仰つても、言ひたくないことは黙つて御出で。」

それは確に懐かしい、母親の声に違ひありません。杜子春は思はず、眼をあきました。さうして馬の一匹が、力なく地上に倒れた儘、悲しさうに彼の顔へ、ちつと眼をやつてゐるのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思ひやつて、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む気色さへも見せないのです。大金持ちになれば御世辞を言ひ、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちと比べると、何という有難い志でせう。何という健気な決心でせう。杜子春は老人の戒めも忘れて、転ぶやうにその側へ走りよると、両手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと涙を落としながら、「お母さん。」と一声を叫びました。

日々のあわただしさに振り回され、人間関係のわずらわしさに疲れる毎日です。私たちは飢えを知らず、戦乱を知らず、それだけでもありがたいことなのに、曇った表情で、あるいは不平不満で膨れ上がったまま過ごしがちだったりします。

「これからがこれまでを決める」とは有名な僧侶の言葉だそうです。これまでがこれからを決めるではありません。これからがこれまでを決める。だから、今をどう生きるかが大切、よくかみしめて、諸君のそれぞれの人生に活かしてください。

どのような状況に置かれようと、10人いれば10通りの人生があります。どのように生きるかは諸君次第、みずみずしい感性とレジリエンスを失わないように。自分のことを変わらず承認してくれる笑顔や慈しみに感謝し、夕焼けや季節の移ろいに感動し、自分の感謝や感動を周りの人に倍返しして、潤いあるコミュニティを築いてほしいと願います。